

アブデュルレシト・イブラヒム著

小松香織・小松久男訳

## 『ジャポonya——イブラヒムの明治日本探訪記——』

(イスラーム原典叢書)

岩波書店 二〇一三・七刊

A5 五三六頁 九四〇〇円

アブデュルレシト・イブラヒム（一八五七—一九四四）は、ロシアのタタール人ウラマー（学識者）、ジャーナリスト、旅行家で、明治末期の日本を訪問したことや、再来日後に東京モスクの初代イマーム（指導者）を務めたことで知られる。本書は、イブラヒムのユーラシア旅行記『イスラーム世界—日本におけるイスラームの普及』（イスタンブル、一九一〇年。原文はアラビア文字表記のトルコ語、すなわちオスマン語）から、日本滞在記の部分を中心に訳出したものである。

イブラヒムのユーラシア旅行については、小松久男著『イブラヒム—ロシア・オスマン帝国・日本』（刀水書房、二〇〇八年）にくわしい。また、『イスラーム世界』の邦訳は、すでに同じ訳者により『ジャポonya—イスラーム系ロシア人の見た明治日本』（第三書館、一九九一年）として刊行されているが、今回岩波書店の『イスラーム原典叢書』への収録に際して、本書では増補・改訂が行われている。このことと留意しながら、以下本書の内容を見ていく。

まず、原書の序文に該当する部分（すべてを開く全知の神よ）と

「トルキスタン」の章が本書では新たに訳出されている。このことにより、帝政ロシアにおいてムスリムの政治運動を組織していたイブラヒムが、一九〇七年末、ブハラ、サマルカンドをはじめとする中央アジア諸都市をめぐる旅に出た動機や背景が明らかになった。さらに、「解説」として、シベリア各地やハルビンを経て、ウラジオストークから日本に渡るまでの行程がまとめられている。

続く「日本」の章は、一九〇九年二月から六月まで、数ヶ月間に及ぶイブラヒムの日本滞在記であり、本書の大部分を占めている。イブラヒムは、日露戦争で強国ロシアに打ち勝ったアジアの新興国である日本と、ヨーロッパ列強の支配に喘ぐイスラーム世界の連携を構想していたとされ、伊藤博文や大隈重信をはじめとする要人と交流をもち、頭山満や犬養毅率いるアジア主義団体「亜細亜義会」の設立発起人にも名を連ねたという。また、日本の文化や教育、政治、軍事から、日本人の性質や生活習慣、宗教信仰に至るまで、多くのことに関心をもち詳細な記録を残した。旧版ですでに訳されていたこれらの事柄に加えて、当時の日本の新聞・雑誌などに掲載されたイブラヒム関係の記事が「日本側資料」として本書の本文中に適宜挿入されていることは、特筆すべき点だろう。そのほかにも、旧版では省略されていた彼のメモ書き（「手帳から」）や原書巻末の付記（余談）（感慨）が新たに訳出されるとともに、日本の章に続く朝鮮と中国の紀行文の概要（解説 離日後のイブラヒムの旅路）が追加された。訳注や訳者解説も、国内外の研究の最新動向を踏まえて、旧版よりも充実度を増している。本書では、「イスラームと中央ユーラシアそして日本を結んで一

つのグローバルヒストリーを構想する上で、興味深い糸口を提供しているように思われる」イブラヒムの思想と行動（五二三頁）が、より複眼的かつ立体的に示されている。本書は、イブラヒムとその時代に関する基礎研究、とりわけ第二次世界大戦時における日本の対イスラーム工作に彼が関与した背景を探るための重要な研究成果として、今後大いに参照されていくだろう。（山崎典子）